
クリスマスは工藤邸で

月姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クリスマスは工藤邸で

【Nコード】

N2755B

【作者名】

月姫

【あらすじ】

平次と和葉・新一と蘭、2組の幼馴染たちと、それを応援している園子のイブイブの物語。

物語の前に―東の異変

蘭の様子がおかしい。

何処がって聞かれると困るんだが。

ほぼ毎日一緒に登下校してるし、期末テストが近いから、時々俺ん家寄って一緒に勉強したりしてるし、ついでに晩メシ作ってくれたりしてるし、変わりねえって言やあ、変わりはねえんだ。

ただな、長年の幼馴染としての勘って言うのか？

何か引っ掛かるんだ。

「新一！あたし今日はお母さんのところ寄るから、先帰るね！」

放課後、昨日提出しそびれた課題を出すために職員室へ向かおうとした俺に、蘭がそう声をかけてきた。

たまにはこんな日もある。

「おう、じゃな！」

そう返して、ふと気がついた。

そう言えば、去年もこの時期、蘭はおばさんの所によく行っていた。

あの時は確か、俺にセーター編んでくれてたんだよな。

おっちゃんと同じ柄だったのがちよつとアレだったけど、スッゲ

エ嬉しかった。

あれって確か…………。

「クリスマスだったっけ」

そっか、蘭の様子がおかしいのは、クリスマスだからか。
もしかして、今年も俺に編んでくれんのかな。

けど、アイツ『クリスマス』の『ク』の字も言わねえし…………。
まあ、約束なんかしなくても、一緒に過ぐすんだらうけどさ。

「俺も一応、プレゼント用意しとくかな」

去年は手袋だったから、今年はマフラーか？

それとも、ちよつと奮発してアクセサリーとか。

花束なんかもいいって、前に親父が言ってたよな。

けどなあ、幼馴染にいきなり花ってのもおかしい気がするしなあ

…………。

いやいや、ここは一気にこう、畳み掛けるってのもアリだよな。

今まで何だかんだとチャンス逃して来てっけど、一応、アイツ
の気持ちは『コナン』の時に聞けるわけだし。

あのレストラン…………は、やめとくか。

泣かせちまったしな。

いっその事、俺ん家で二人つきりってのもいいよな。

足取りも軽く、職員室に向かう。

俺はこの時、自分の思いつきにちよつと浮かれていたのだ。

物語の前に―西の異変

和葉の様子がおかしい。

何処が、言われても説明出来んのやけどな。

「ただいま」

「おかえり」

「おかえり」

玄関開けて帰宅を告げると、奥から女二人の声が聞こえて来た。

「もうすぐご飯やから、さっさと着替えて来てな」

お盆に皿やら何やら載せた和葉が、通りがけに声を掛けて来る。

和葉が家に居るんは、よくある事や。

せやけど、何や気に障る。

別に、鬱陶しいとかそう言う意味やなくて、和葉のどっか浮かれ
とるような様子が気になんねん。

「これ、可愛いやろ？サンタさんの袋がポケットになっとるんよ？」

晩メシ並べながら『オバチャンが買ってくれたん』と、新品のエ
プロンを広げて見せる和葉に、浮かれとるんはクリスマスやからか
と思いつた。

ガキの頃にも買ってもらった、30センチくらいのちっこいツリー
は今も現役で、明日あたり、去年と同じに玄関の下駄箱の上に出て

来るやろ。

勿論、飾り付けるんは和葉や。

同じモンは遠山家にもあって、今年も居間のサイドボードの上に飾られるハズや。

いつもと同じ。

同じハズやねんけど……。

「……変わった事なん、ないやんな？」

去年はウチの庭木に電飾つけたい言うてオカンと盛り上がってたけど、オレの非協力的態度と、居間から見える松の木には電飾は似合わん言う事でお流れになった。

あれから新しい庭木は入れとらんし、今年はそんな話は出とらんかったハズ。

「自分らでやるのは無理や言うtotたし、庭に電飾はないやろけど……」

それやったら、何や？

何が引っ掛かっtorんやろか？

「……まあ、ええか」

どうせ大した事ないやろ。

そう判断したオレは、取り合えず放っておく事にした。

イブイブの計画

始まりは園子の一言だった。

「世の中、クリスマス一色だねえ……」

学校帰りに寄ったファーストフード、2階の窓際というロケーション的には中々いい席から、まだ12月初旬だと言うのにクリスマススムード一色に染まった街並みを見下ろしながら、園子がつまらなそうに呟いた。

「蘭はいいわよね。今年も新一君とラブラブで過ごすんでしょう？」

ポテトを摘みながらからかのような笑みを見せる園子に、蘭はうっすらと頬を染めながらも、とんでもないと首を振る。

「あ……あたしたち、そんなじゃないし、それにクリスマスだからって約束なんてしてないし……」

そこまで言って、蘭は小さく息をついた。

「アイツの事だもん、クリスマスなんて関係なしに、また事件だつて飛び出してっちゃうよ、きっと」

「それはありうるわね」

園子がうんうんと頷く。

暫く行方不明になっていた新一は、当たり前のような顔をして突然戻って来た。

『よお』と片手を上げて見せた新一に、蘭は一瞬言葉を失った。

安堵と嬉しさと。

そして、今までの寂しさや不安や心配から変換された行き場の無い怒りと。

そんなごちゃ混ぜの感情から紡ぎだされた言葉は『お帰り』の一言で。

結局、彼が帰って来たからと言って何が変わるでもなく、二人は今まで通りの『日常』を過ごしているのだ。

今まで通りの日常……それには、事件と聞けば他の事は全て後回しになってしまうという『大馬鹿推理之助』という項目も、勿論含まれていた。

「それより、園子はどうなのよ？京極さんとデートなんじゃないの？」

お返しとばかりに、今度は蘭がにんまりと笑う。

蘭と違って、園子には正しく恋人と言える人がいる。

尤も、彼は1年の大半を海外で過ごしているので超遠距離恋愛ではあるのだが、二人が上手くいっている事は、園子の様子から蘭も感じ取っていた。

だからこそのからかいだったのだが、いつもなら京極の名前を出せばすぐにでも愚痴まじりの惚気話を繰り広げる園子が、今日は何故か全身の力が抜けるようなため息を零した。

「真さん、帰って来ないのよ」

「あれ？年末年始は帰って来るって言ってなかったっけ？」

「年末年始はねえ。その中にクリスマスってのは入ってないのよお」
「そうなんだ……」

確かに、クリスマスは年末と言うには早いかもしれないが、蘭たち学生にとっては休暇中だし、その頃には帰って来ているものだと思う込んでいたのだ。

「真さんは帰って来ないし、家のパーティーには出なきゃならないし……。世の中クリスマス一色で、どっちを向いてもカップルだらけだってのに、なあにが悲しくてオジサマたちの相手しなきゃならないんだか……」

ぶつぶつと愚痴りながら、拗ねたようにポテトをぱくついていた園子が、いい事を思いついたとばかりにずいっと身を乗り出した。

「ねえ、蘭。クリスマス、特に予定ないんだったら、家のパーティーにこない？」

「園子さんのパーティー？」

「うん。オジサマばかりでいい男もあんまりいないし、結構退屈なのよね。蘭が来てくれると嬉しいんだけどな」

「でも、鈴木財閥のパーティーなんて……」

「気にしない気にしない！それに、パーティーは23日だから、イブに予定入っても大丈夫だし」

「予定なんて入らないわよ！」

うふふ、と含み笑いをする園子が新一の事を言っているのだとわかって、蘭が慌てて否定する。

「じゃあ、OKよね？レンタル用だけど、ドレス用意させるし、フアッシュンショーとかしてさ、女の子だけでパーティーとやろうよ！」

「うん……いいね、それ」

少しだけ考えて、蘭は園子の話に乗る事にした。

「あ……和葉ちゃんはどうだろう？」

「和葉ちゃん？クリスマスはデート……は、ないかもね。服部君と新一って似たもの同士だし」

蘭がため息まじりに苦笑する。

蘭と和葉の電話での話題は、専らお互いの幼馴染の探偵の事。

事件と聞くと回りが見えなくなる所も、推理以外の所では結構鈍感な所も、女の子に人気がある所までもが似ていて、同じような愚痴を言い合ったりもしているのだ。

「あっちもねえ、あれだけ人前でいちゃついてて、まあだ『幼馴染』とか言ってるし」

園子は別の意味で苦笑する。

蘭と新一といい、和葉と平次といい、どう見ても相思相愛だろうに、何でそこまで幼馴染だと言う事に拘るのか、園子には今一つわからない。

「……近すぎるとわからないもんなのかなあ」

「何が？」

「何でもない。それで、和葉ちゃん誘ってみる？」

「そうだね。今夜にでも電話してみる」

「デートだったらいいのよって言っというて」

「うん」

悪戯っぽくウインクする園子に、蘭もお茶目なウインクを返した。

蘭からの電話を受けた和葉にも異論は無く、こうして、女3人の

イブイブ計画は実行に移されたのだった。

イブイブの彼女たち

23日、天気は快晴。

スッキリと目覚めた蘭がまずしたのは、携帯を確認する事。

今日は出かけると昨夜のうちに新一にメールを送っておいたのに、返事は来ていない。

終業式当日、解散になるやいなや事件だと走り去った幼馴染は、結局帰宅しなかったらしい。

ため息一つだけ零して、いつものように父と朝食をとってから、お泊りセットを入れた小さなバッグを片手に、蘭は園子との待ち合わせ場所へと向かった。

和葉が着くのはちょうどお昼頃なので、お昼は三人で食べようという事になっている。

それまで軽くお茶でもしようかと、二人は園子お勧めの紅茶専門店に入った。

「新一君もだけど、服部君の方も相変わらずみたいね」

蘭がセイロン、園子がケニアを注文した所で、蘭の携帯に入った和葉からのメール。

『今、新幹線に乗った』というお知らせメールの最後に付け加えられた『平次は事件や言うて昨日から出かけとる』というメッセージを見ての園子の感想に、蘭も思わず頷いていた。

園子からイブイブのパーティーに誘われた夜、蘭は和葉に誘いの電話をかけた。

勿論『クリスマスは服部君とデートでしょ?』というからかいの言葉と共に。

それに対する返事は、蘭が園子に対して返したのと同じもので、パーティーの誘いへの返事もまた同じだった事に、二人して大笑いした。

本当は、幼馴染としてでもいいから、クリスマスを彼と一緒に過ごしたかった。

それは蘭と和葉に共通した想いだ。

けれど……。

幼い頃から、いろんなイベントと一緒に過ごして来た。

だから、誘えば多分イヤとは言われないだろうとも思う。

けれど……。

毎日カレンダーとにらめっこをして、その日が来るのをドキドキしながら待っているのは自分たちだけで、彼らにとっては、自分たちとクリスマスを過ごすというのは日常の延長でしかなくて、もし事件でも入ったならあっさり切り捨てられてしまうものだという事もわかってしまっている。

だから……。

だから、たまには『待たない』という選択を試してみようと思ったのだ。

「和葉ちゃん！こっちこっち！」

「蘭ちゃん！園子ちゃん！」

「久しぶり〜！」

女三人寄れば姦しいと言うが、彼女たちも例外ではなく、きゃいきゃいと再会を喜び合う。

安くて美味しいと評判のイタリアンレストランでお昼を食べて、ちよつと早いけどパーティードレスを選ぼうと言う事になった。

「取り合えずホテル行こう？」

園子に促されて、三人は今夜の宿泊先となるホテルへと向かった。

通されたのは、最上階のスイート。

鈴木財閥のパーティーを任されているホテルだけあって、広さも内装も申し分ないが、高校生が泊まるにはあまりにも贅沢にすぎた。平然としているのは園子だけで、蘭と和葉は思わず入り口で立ち止まってしまった。

「……ホンマにええの？」

そもそも、鈴木財閥当主が取引先や関連企業のお偉方や付き合いのある人たちを集めて催すパーティーに、令嬢の友人というだけで参加する事にも無理があるのに、この待遇では二人もさすがに気が引けてしまう。

「勿論！ 気にしない気にしない」

園子はひらひらと手を振ると、ソファに身体を投げ出した。

「パパもママも、最初の挨拶さえちゃんとすれば後は好きにしていって言ってるし、今日はこの部屋空いてるから使いなさいって言うってたから。たまにはお姫様気分もいいでしょ？」

「園子ちゃんがそう言うてくれるんなら……」

「うん……」

まだ少し気後れはあるものの、蘭と和葉はこの状況を楽しむ事にした。

女三人でとにかく楽しもうというのが、今回の目的なのだ。

「じゃあ早速、ドレス選ぼうか？」

そう言って、園子がリビングの続きの間を開ける。

そこには、ブティックと見紛うほどに、華やかなドレスが溢れていた。

それも一目で上質なものだわかるものばかりだ。

「園子……」

「選ぶって……」

予めドレスを貸してくれると言われていたが、蘭も和葉も、何着か揃えられた中からサイズの合うものを見つけるのだと思っていたので、後の言葉が続かない。

「うちに出入りしてるレンタルショップのだけど、今日空いてるサイズの合うヤツ、全部持ってきてもらったのよ」

「そんなん、大変やん」

慌てる二人に、園子はまたひらひらと手を振って見せる。

「だあいじょうぶだって。どうせ、何かの時のために用意させてるんだし」

「何かって？」

「もしウエイターがお客様のドレス汚した時とかね、クリーニングが終わるまで、代わりのドレスが必要になるでしょ？主催者としては万が一って事も考えておかないといけないから、今日はありったけのドレスを用意してもらおう事になってるの。どうせ一日借り上げてるんだもん、着なきゃソンじゃん？」

あっけらかんとした園子の様子に、蘭と和葉も肩の力を抜いた。

「だったら……」

「ねえ……」

綺麗なドレスを着てみたいというのは、女の子なら当然の事。

「目移りしちゃうなあ」

「どれもステキなんやもん、選びきれんわ」

色とりどりのドレス。

シルクにタフタ、ベルベット。

見れば見るほど、どれか一着に絞り込めなくなる。

「じゃあさ、お互いにドレス見立ててみようよ。わたしと蘭で和葉ちゃん、わたしと和葉ちゃん、蘭で蘭」

園子の提案に、蘭と和葉は顔を見合わせて小さく頷いた。

「なら、あたしと和葉ちゃん、園子ね？」

「そう。たまにはイメチェンもいいじゃない？」

「そやね。自分で選ぶとどうしても似たデザインになってまうもんね」

「そうと決まれば、まずは蘭から！」

色とりどりのドレスの間を、園子と和葉が泳ぐように動く。

「園子ちゃん！これなんかどうやろ？」

和葉が見つけたのは、シャンパンゴールドのビスチェタイプのタイトなミニドレス。共布のボレロとスカートの左前部分に入った下品にならない程度のスリットが、大人っぽさと可愛らしさを上手く融合させている。

「それいい！じゃ、アクセはこれ！」

園子を選んだのは、シフォンジョーゼットの小振りのバラの髪飾りとリボン、それとベビーパールの三連チョーカーだった。

「バラを左耳の上に飾って、このリボンを髪に編みこんでふわっと

肩から胸に流してさ。イヤリングはベビーパール一粒だけね。あんまり着けるとうるさくなっちゃうし……靴はこれ」

ドレスと同系色の少し高めの艶のあるピンヒール。サイドに飾られた金の鎖が少し大人っぽいイメージだ。

「蘭は赤系が似合うけど、こういう感じもイケると思うよ？」

「似合うかなあ？」

「勿論！」

少し照れたような蘭の問いに、和葉は思いつきり頷いた。

「じゃあ、次は和葉ちゃん」

蘭のために選んだドレスと小物を隣の部屋のソファに置いて、今度は蘭と園子がドレスの見立てに入った。

「和葉ちゃんって暖色系が多いよね？後はライト系の色」

「うん。でも色が白いし、深い色も似合うと思うんだよね」

「だからって、黒はちょっと大人っぽすぎるかなあ」

「じゃあ、これは？」

園子が見つけたのは、マジョリカブルーのオフショルダーのセミロングドレス。鎖骨を強調するような綺麗なラインの襟元は、オーガンジー。マーメイドラインのスカートは前部分が少し短くデザインされ、後ろにかけてまるで人魚の尾のように流れている。

「それなら、アクセサリーはこれなんてどう？」

蘭が手にしたのは、プラチナにティアドロップカットのアクアマ

リンがあしらわれた、少し長めの揺れるタイプのイヤリングと、同じデザインのネックレス。

「髪は下ろして、耳が見えるようにサイドだけちょっと後ろに流す感じにして……」

「手元が淋しいから、レースの手袋なんてどうかな？」

「いい感じ！で、靴はこれね」

ベルベットのような手触りのミッドナイトブルーのピンヒール。足首の後ろで結ばれる細いリボンがアクセントになっている。

「髪下ろすん？」

「そうよ。どうせなら思いっきりイメチェンしなきゃ！大丈夫、似合うから！」

戸惑う和葉に、園子はキツパリと言い切る。

「なら、園子ちゃんは」

「これなんてどう？」

蘭が手にしているのは、オフホワイトのハイネックのミニドレス。タイトミニのスカートの上に柔らかなチュールをあしらって、ふんわりとフェミニンに仕上げられている。

「襟んとコにもチュールのリボンがついとるから、アクセサリーはイヤリングやね。髪はちょっと外に跳ねた感じにして」

和葉が選んだのは、中心にルビーを嵌め込んだ、花をモチーフにした金のイヤリング。

「手袋はちよつと鬱陶しくなりそうだから、ブレスレットなんてどう？」

蘭が細い金細工のブレスレットを合わせる。

「ええんやない？ 靴はこれ」

艶のあるオフホワイトのピンヒール。留め金に金色の小花をあしらったストラップが可愛らしさを添えている。

「決まりだね」

並べられたドレスを眺めて、三人は満足げに頷いた。

「ドレスはこれでいいとして、髪結うのも大変だし、メイクさんにやってもらおうか」

「そこまでしてもらったら悪いよ」

ドレスを借りた上にヘアメイクまではさすがに受けられないと、蘭と和葉が首を振る。

このドレスにしても、本来はレンタル料を払わなければならないのに、厚意で貸してもらっているのだ。

「改めて呼ぶわけじゃないから、心配しなさんな。メイクさんもスタンバイしてるのに、仕事がなかったら可愛そうじゃん？ それに、せっかくだもん、お化粧も綺麗にしてもらいたいし」

「メイクさんまでいるん？」

「何があっても対応出来ますってね。鈴木財閥としてのパーティーだもん、念には念を入れないと」

「大変なんやねえ」

「大変なのはパパたちとスタッフよ」

結局、あっさりと言つてのける園子に押し切られて彼女たちはドレスアップされていた。

パーティー会場の魔女

「ホント、もったいないよねえ。こんな綺麗な蘭と和葉ちゃん見られないなんて、新一君も服部君も大きな幸せ逃してるわねえ」

パーティー会場に向かう廊下でまじまじと二人の姿を眺めながら、園子がにんまりと笑った。

「あら、京極さんでしょ？」

蘭も負けじと笑い返す。

「京極さんて？」

ほんの少しだけ頬を染めた和葉が、聞き覚えのない名前に首を傾げて、蘭に尋ねる。

その問いに、蘭は楽しそうな笑みを見せた。

「園子の彼氏」

「どんな人なん？」

三人の中で唯一、京極と面識のない和葉が、興味津々とばかりに話を振る。

「カッコイイよお。ね、園子？」

「まあね」

蘭に話を振られた園子が、ちょっと照れくさそうに明後日の方を向く。

「同じ学校の人なん？」

「ううん、学校は別で、一つ上」

「年上なんや」

「うん。でね、空手のチャンピオン」

「じゃあ、蘭ちゃん通して知り合ったん？」

「そう言う事になるのかな？」

「園子があたしの応援に来ててね、見初められたのよ」

「わあ……」

「色黒で、あんまり愛想のいいタイプじゃないんだけど、誠実で」

「へえ……会うてみたいなあ」

「和葉ちゃんに見せようと思って、京極さんの載ってる雑誌、持ってきてるんだ。後で見せてあげるね」

「うん、楽しみやわあ」

いつもは園子にからかわれるばかりの蘭と和葉が、お返しとばかりに京極の話題で盛り上がる。

そうこうしているうちに、パーティー会場となる大広間に着いた。

「じゃあ、わたしパパたちの所に行って来るから」

そう言って控え室の方に行く園子を見送って、二人は会場に入った。

さすがに中央の方に行くのは躊躇われるので、ウェイターに貰ったソフトドリンクのグラスを手に、少し端の方から会場を眺める事にする。

鈴木財閥会長の挨拶で始まったパーティーは、嫌味にならない程度に豪華で、やはり園子の言ったように年配者が大半を占めていた。

「高校生ってもしかしてアタシだけかもね」

そうっと囁いた和葉に、蘭も辺りを見回して頷いた。
若い人たちがいないわけではないが、皆既に職に就いているような年齢に見える。

そんな中、臆する事無く挨拶をして回っている園子を見て、蘭が小さく息をついた。

「園子って、やっぱりお嬢様なんだね」

普段は殆ど意識しないが、こう言う場ではやっぱり育った環境が違うのだとわかる。

それを鼻にかける事のない彼女は、本当に優しい性質を持っているのだろうと蘭は改めて思った。

「京極さんって人が惚れるんもわかる気いするわ」

蘭と同じ事を感じたのか、和葉が小さく呟いた。

「あゝ疲れた」

一通りの義理を果たした園子が、壁際で会場を眺めていた二人の所に戻って来て大きなため息をついた。

「大変そうやねえ」

「まあね。でも、蘭や和葉ちゃんだって、無関係じゃられないでしょ?。」

「何が？」

「こういうパーティー」

意味がわからなくて首を傾げる二人に、園子は意味深な笑みを見せた。

「新一君のご両親は世界的にも有名人だから、何だかんだとパーティーに呼ばれてるでしょ？服部君の所も結構な家柄らしいじゃん？」

「新一の所は確かにそうだけど……」

「平次んとコも昔からの家やけど……」

「そんな家の御曹司の彼女だもん、そのうちイヤでも出なきゃならなくなるわよ」

「そ……そんなじゃないって！」

「幼馴染言うだけで、そういうん関係ないし！」

慌てる二人に、園子は思わず吹き出していた。

「園子」

「園子ちゃん」

「だってえ、二人とも可愛いんだもん！」

ケラケラと笑う園子につられるように、蘭と和葉も笑い出した。

趣の違う美少女たち。

その華やかな光景に、会場からは幾つもの視線が投げ掛けられていた。

園子は鈴木家の令嬢として見知っているが、後の二人はこの令嬢かと囁く声もある。

健康的な美しさに惹きつけられる独身者と、鈴木家と関係のある女性なら知り合っておいて損はないという思考を持つ親たち。

さすがに、あからさまに声をかけてくるような人間はいないので蘭も和葉も気付いていなかったが、こういう場に慣れている園子だけは、それに気付いていた。

「そろそろかな？」

近くを通りかかったウェイターに時間を確認した園子が、緊張も解けてパーティーを楽しみ始めた二人に声を掛けて、会場を出た。

急いで部屋に戻り、予め作っておいたメールを確認すると、送信ボタンを押した。

「さて、間に合うかな、名探偵くんたち？」

探偵たちの事情

終業式前日に届いた依頼状。

その差出人に連絡を取って、終業式が終わってからでも間に合う時間を設定した平次は、家に帰り着くと食事もそこそこにまた家を飛び出していた。

依頼人宅は然程遠くはなく、バイクで一時間とかからない所にあった。

依頼状を見る限りでは時間のかかるようなものでは無かったし、実際そう遅くない時間に解決出来たので、そのまま帰宅するつもりでいた平次だったが、帰りがけに別の事件に遭遇して、顔見知りの刑事と一緒に捜査に加わっているうちに、夜明けを迎えていた。

署内で仮眠して行くかという誘いに、まだまだ平気やと返して、バイクを飛ばして平次が帰宅したのは、朝食には少々遅いくらいの時間。

昼夜逆転しとるなあと呆れる母親の出してくれた食事をもって、汗を流してベッドに入ったのが、昼前。

目が覚めた時には、既に夕暮れを迎えていた。

「今日は和葉来とらんのか？」

喉が渴いて台所に顔を出した時、そこに立っていたのは平次の母、静華一人。

この時期、毎日のように服部家で夕食をとっている和葉は、大抵

静華と一緒に台所に立っているのに、今日はその姿が見えない。

不思議に思った平次の問いに、静華は忙しく手を動かしながら顔だけを向けた。

「和葉ちゃんなら、お友達の所のパーティーにお呼ばれた言うてたで？」

「は？聞いてらんで？」

「遠山さんが許しとるんや、アンタに報告する必要ないやろ？」

「そらそうやけど……」

確かに、自分に断る必要はないと思うが、何となく釈然としないものを感じて、平次は口を噤んだ。

いつも傍に居る和葉がいないと言う事に酷く違和感を感じている自分に、いつからか平次は気付いていた。

彼女が出先を伝えて行かなかったと言うだけで不機嫌になってしまいう事にも。

それがどこから来るものなのかも。

気付いていながら、あえて気付かないフリをしているのだ。

「和葉ちゃん、今日はお友達の所に泊まるって言うてたから、今年のクリスマスは特に用意しないで？」

冷蔵庫からお茶のペットボトルを取り出して居間へと向かおうとする平次に、背を向けたままの静華が声を掛ける。

その内容に一瞬足を止めた平次は、そのまま自室へと駆け込んだ。

一方、新一の方も平次と似たような状況にあった。

終業式の後、少しばかり込み入った事件にかかわっているうちに日付が変わっていて、自宅に帰った時には昼を過ぎていたのだ。

少し違う所と言えば、汗を流して少し眠ろうと思った時に、前日の夜に蘭が送っていたメールに気付いて、彼女が今日出かけていると知った事くらいだろうか。

「どこに行くかくらい書いておけよな」

ぼそっと呟いた新一が蘭の出かけた先を知ったのは、園子からのメールが届いた時だった。

自室に戻った平次は、ベッドに寝転がったまま、携帯を睨み付けていた。

終業式前、和葉と仲の良いクラスメイトたちは皆、クリスマスはデートだのパーティーだのと騒いでいたが、その中に彼女が参加するような内容はなかったはずだ。

それに、こういうイベント事の時にもし和葉が誰かと出かけるとしたら、お節介な連中がからかい混じりに平次に報告してくるのが常だ。

それが無かったと言う事は、学校関係の友人ではないと言う事。それ以外で和葉が泊り掛けで出かける先と言えば、平次の知る限り東京の友人の所しかない。

「それやったら、工藤からメールでも来とるやろうし……」

電話の一本、メールの一通で事は足りるが、新一に尋ねるのも気が進まず、かといって和葉に連絡を取るのも気が引けて、携帯に表示させていた電話番号を消して、平次は小さく息をついた。

過保護だの心配性だのと新一にからかわれるだろうと言うのが理由の大半だったが、彼女を束縛するような事はしたくないと言うのが、もう一つの理由。

自分も行き先を告げずに出かけているのに、彼女の居場所を常に知っていなければ気が済まないというのは、あまりにも我侭だと、平次にもわかつているのだ。

それでも、もし出先で何かあったら……そんな不安は拭えない。

行き先を知っていたからと言って、その場にいないのならば手を貸す事も出来ないのだが、居場所を知っていれば、駆けつけてやる事は出来るだろうと思うのだ。

たとえば力になってやれなくても、傍に居てやる事は出来るだろうと。

もう一度小さく息をついて、平次は改めて携帯のボタンを押した。呼び出し音の先にいるのは、東京の友人。

彼なら、和葉の友人である彼女の事を知っているはずだと踏んだのだ。

コール6回目で、目的の相手の不機嫌そうな声が携帯の小さなスピーカーから流れて来た。

『何だよ?』

「よお、元気にしとるか？」

『何の用だ？』

相変わらずの調子に小さく苦笑して、平次は用件を切り出した。

「いや、そっちに和葉行つとらんかと思ってな」

『和葉ちゃん？』

「友達とパーティーや言うて、泊り掛けで出かけとるらしいんやけど」

『……心配性だな』

「オマエに言われたないわ」

微妙な間を置いての新一のツツコミに即返して、平次は話を戻した。

「……で、どうなんや？」

『いや、来てねえ……ってか、蘭も今日出かけてるらしいんだよな』

「一緒なんかな？せやったら、姉ちゃんトコに泊まるんやろか？」

『そうなんじゃねえ？何なら、蘭に聞いてやろうか？』

「いや、ええわ。後で和葉にメールでもしとくわ」

夕飯が出来たという母の声に、平次はそこで通話を切った。

魔女からの予告状

平次から新一に電話があったのが、午後7時。

何となく空腹を覚えた新一は、買い置きのレストラン食品で軽い夕食をとった。

そのまま特にやる事もなく新聞に目を通してある時に、テーブルに投げ出してあった携帯がメールの着信を告げた。

送信者は園子。

「『予告状』だあ？」

新一と園子は、そこそこ長い付き合いで親しくしているから、お互いの携帯の番号やアドレスは知っているが、特に用事もなくメールをやりとりするような仲ではない。

フザけたタイトルながら、急ぎの用事かと本文を開ける。

『シンデレラの魔法は何時に解ける？東西の姫君はわたしの手の内、イブを告げる鐘の音が終わるまでに現れなかったら、姫たちのガラスの靴は隠しちゃうわよ？お姫様たちはお城の塔の上。見失う前に迎えに来なさい』

メールに目を通した新一が反射的に壁の時計を見上げた。

現在20時10分。

メールの内容から察するに、蘭と和葉は園子と一緒にいるらしい。新一に対して、彼女たちは自分の所にいるから、日付が変わるまでに迎えに来いと言っているのだ。

「園子んとここに居るんなら、そのまま泊まっちゃえばいいだろうに」

そうは思うが、園子がわざわざこんなメールを寄越したのは、何か彼女らしいウラがあるのかもしれないと、新一は蘭の携帯を呼び出した。

「気がつかねえのか？」

コールは続いているが、一向に出る気配はない。

もしかしたら、携帯を置いたまま席を外しているのかもしれないと、今度は園子の携帯を鳴らした。

が、こちらも出ない。

念のためにと和葉の携帯にもかけたが、こちらも出なかった。

「そういや、さっき服部がパーティーがどうのって言ってたよな」

和葉は友達とパーティーだと言って出かけた。

と言う事は、一緒に居る蘭も園子も、パーティーに出ていると言う事だ。

学校では、友人たちでのパーティーの話しも出ていたが、二人ともその中には入っていなかったはずだ。

「待てよ……」

その話題が出ていた時、園子は家のパーティーがどうのと言っていたのを、新一も聞いていた。

「それって、今日だったわけ？」

今一つ記憶に自信がない。

だが……。

園子と一緒にいる事。

和葉はパーティーだと言っていた事。

そして、迎えに来いというあのメール。

その意味する所は……。

「蘭たちだけのパーティーじゃなくて、園子ん家のパーティーに出てるって事か？」

新一は思わず立ち上がっていた。

現在20時16分。

園子の家がパーティーを開いているなら、その場所を特定するのは難しくない。

新一が行動するには時間は充分すぎるほどある。

悪戯好きの園子なら、もっとギリギリになってから連絡してくるはずだが、彼女はおそらく平次のアドレスを知らない。

新一から平次に連絡をとる時間と、彼が東京まで駆けつける時間を見越して、このメールを送ってきたのだろうと察しがついた。

園子に踊らされるのはシャクだが、彼女の指定した時間までに行かなかったら、年末年始に予定されているだろう様々なパーティーに二人を飾り立てて連れ回し、自分の友人だと紹介しまくるだろう事は目に見えているし、それは自分にとって非常に面白い事だと新一も自覚している。

それに、この事を平次に知らせなかったなら、後で彼からどんな報復があるかわからない。

現在20時18分。

ソファに座り直した新一は、ため息一つついて、大阪の友人の携帯を鳴らした。

3回目のコールで呼び出し音が途切れる。

「服部、これからすぐこっちに來い」

相手の声を聞く前に、手早く用件だけ伝える。

今の時間からでは、新幹線も飛行機も、最終ギリギリだろう。

『いきなり何や?』

「和葉ちゃんの居場所がわかった。理由は後で言う。急いで來い」

『……今からやと、最終ののぞみには間に合うと思う』

呆れたような平次の問いを無視してもう一度繰り返すと、平次はほんの少し沈黙した後、そう応えた。

「間に合わせろ。乗ったら電話くれ」

言いたい事だけ告げて、通話を切る。

園子のメールにあった『お姫様はお城の塔の上』と言うのは、パーティーの開かれている場所、おそらくホテルを城に見立てて、その最上階にいると言う事だろう。

鈴木財閥のパーティーならば、都内の財閥傘下のホテル、それも一流所。

大して時間もかからずに、場所を突き止めた。

「後は、東京駅からホテルまでのアシだな」

平次が到着するのは、多分12時近く。

駅からホテルまで最短時間で移動するために最適なのは……。

「俺、服部の事言えねえかも」

心当たりで電話をかけながら、新一はこっそりと呟いた。

魔女と姫君と探偵

いきなりの新一の呼び出しに一瞬だけ迷ったが、平次は通話が切れるなり、バイクのキーを掴んで部屋を飛び出していた。

居間に居る母には、東京に行つて来るとだけ告げて、新大阪の駅へと急ぐ。

最終ののぞみには充分間に合う時間には着いたが、バイクをどうしようかと考えて、丁度目に付いた派出所に、ここぞとばかりにツテを使って、暫く置いてもらう約束を取り付けた。

東京行きの最終ののぞみ。

滑るように駅を離れる新幹線のデッキで、新一の携帯を呼び出そうとして、平次は新着メールに気が付いた。

発信人は新一。

『シンデレラの魔法は何時に解ける？東西の姫君はわたしの手の内、イブを告げる鐘の音が終わるまでに現れなかったら、姫たちのガラスの靴は隠しちゃうわよ？お姫様たちはお城の塔の上。見失う前に迎えに来なさい』

「何やねん、コレ」

画面に毒づいてから、改めて新一の携帯を呼び出す。
コール1回で新一が出た。

「今、新大阪出たで」

『最終ののぞみだったよな?……って事は、到着予定は23時48分か』

「一体何やねん、あのメール?」

『何だと思う?』

平次の問いに、新一が問い返す。

「オマエが送って来た言う事は、和葉らに関係あるっちゅう事やろ?単純に読めば、午前零時・姉ちゃんと和葉・今日中の迎え・パーティー会場の最上階」

『ご明察。蘭と和葉ちゃんは、園子の家、つまり鈴木財閥のパーティーに出てる』

「鈴木財閥?ウチのオカンは友達に呼ばれた言うとしたで?」

平次の声のトーンが少し上がった。

『友達は友達だろうが』

「普通、友達のパーティー言うたら、カラオケとかファミレスとかやろ」

『俺もそう思うけどよ、そのメール、園子が送って来たんだ』

「で?」

短い平次の問いの意味を正確に汲み取って、新一がため息混じり

に告げる。

『ガラスの靴を隠すだの見失うだのってあるだろ？それって、俺たちが今日中に迎えに行けなかったら、あちこちのパーティーに蘭たち連れ歩くぞって言ってんだよ』

そこまで聞いて、平次にも状況が飲み込めた。
新一が急がせたわけも。

『東京駅着いたら、丸の内の中央改札を出ろ。迎えに行く』

「間に合うんか？」

『間に合わせるさ』

東京駅からホテルまで、どれくらいの距離があるのか平次にはわからないが、自信たっぷりと言い切る新一に移動手段の見当がついて、平次は低く笑った。

「……オマエも人の事言えんよな」

『うるせえ』

「楽しかったね」

「うん。ツリーもめっちゃ綺麗やったし」

「真田一三のマジックショーも見られたしね」

パーティーもお開きになり部屋へと戻った蘭と和葉は、せっかくドレスを着て豪華なスイートにいるんだと、園子が頼んでくれ

たルームサービスで運ばれてきた紅茶を飲みながら、お姫様気分に浸っていた。

園子は招待客の見送りをするとかで、まだ戻って来ていない。

「せやけど、お嬢様いうんも結構大変なんやね」

「そうだね。あたしには無理そう」

最初に挨拶をしてまわっていた園子は、その後も度々声を掛けられていた。

見るからに自分の祖父母以上の紳士や、若手実業家らしき人たちとも自然に会話していた園子に紹介されるたび、蘭も和葉も内心ドキドキしながら会釈していたのだ。

「お父さんがいてくれれば、少しは落ちついていられたと思うんだけど」

「せやね。アタシも何度か大きなパーティーに連れてってもらった事あるけど、いつもお父ちゃんや平次が一緒やったし」

「そうよね、いつも服部君と一緒にだもんねえ」

口元に手を当てて、蘭がからかうような笑みを浮かべる。

「蘭ちゃんかて、いつも工藤君と一緒にやん！」

和葉も、そっくりそのまま蘭に返す。

「でも、和葉ちゃんたちって、二人だけで泊り掛けで遠出したりとかしてるじゃない？」

「それは、ほら、アタシらの親って警察官やん？せやから、ちっちゃい時から留守の事も多くて、どっか出かける時は平次んトコと一

緒いうんが多かったんよ。その名残やねん。ホンマに姉弟で出かけとるようなもんなんよ?」

今回は蘭の優勢勝ちのようで、和葉は頬を染めながら言い訳の言葉を並べた。

「お待たせ!」

園子が戻って来たのは、パーティーがお開きになってから、1時間以上もたってからだった。

「お見送りご苦労様」

「結構人数いたから、時間かかったかった」

一緒に来たホテルマンが、テーブルに新しい紅茶のセットと小さなケーキを置いて下がると、園子は疲れたように椅子に身体を投げ出した。

「あと20分」

「何?」

「イブまであと20分よ」

「もうそんな時間なんだ」

園子に言われて初めて、蘭と和葉はそんなに時間が経っていたのだと気付いた。

「そろそろ着替える？」

「まだいいじゃん。シンデレラだって12時まではお姫様だったんだし」

腰を上げようとする二人を制して、どこか楽しげに園子が笑った。

イブを告げる鐘

23時48分。

定刻通りに東京駅に着いたのぞみのドアが開いた瞬間、平次は駆け出した。

時間的なものなのか、いつもよりずっと人影の少ない構内を走り抜け、新一に指定された丸の内中央改札が出る。

「こっちだ!」

掛けられた声に振り返ると、新一が大きく手を振っていた。

その後ろには、見慣れた白黒ツートンの車。

「じゃあ、よろしく、由美さん」

「まかせて!」

後部シートに滑り込むと同時に、赤色灯を回転させながら、パトカーは夜の街へと飛び出した。

「そっちのコが西の名探偵クン？」

ハンドルを握っている由美が、バックミラー越しに視線を投げ掛けてくる。

それに、平次は人懐っこい笑みを返した。

「せや、手間かけてもうてスマンな」

「いいのよお。さすがにサイレンはマズイけど、これくらいならね。年末の特別警戒中だし、何とでも誤魔化してあげるわよ。でも、そのかわり……」

バックミラーの中で、由美の瞳が、好奇心に輝く。

「わかってます。高木さんと佐藤さん情報でしょ？ちゃんと流してあげますよ」

「よろしくね！」

楽しげに笑った由美が、少しアクセルを踏み込んだ。
窓の外を景色が流れていく。

23時58分。

「さあ、着いた。頑張りなさい！」

突然現れたパトカーに何事かと駆け寄るホテルマンは由美に任せて、新一と平次はエントランスからエレベーターホールへと向かった。

さすがに出歩く人も少ないらしく、エレベーターはスムーズに2人を最上階へと運ぶ。

「部屋はわかつとるんか？」

「最上階のスイートルームは2つ。後はVIPが泊まる時のお付きの人の部屋と、サービススタッフの詰め所があるだけだ。お前もパトカーの中から確認したろ？」

「灯りが点いottaんは、右手奥」

「そこだ」

エレベーターのドアが静かに開く。

タイムリミットまで20秒を切っている。

エレベーターを降りて右手奥の突き当たり。

明らかに他の部屋とは違う、重厚感のあるドア。

軽くノックを2つ。

一拍置いて、今度は少し強くノックを2つ。

繰り返す事5回目で、人の動く気配がした。

ドアが静かに開けられる。

「いらっしゃい。合格ね」

顔を出した園子の声に被るように、彼女が手にした携帯から、ジングルベルが流れ出した。

「蘭！和葉ちゃん！お迎えが来たわよ！」

園子が部屋の奥に呼びかける。

「お迎え？」

園子に呼ばれるままにドアへと出て来た蘭と和葉は、そこに思いがけない人を見つけて、言葉を失った。

新一と平次もまた、彼女たちとは違った意味で、言葉を失う。

「はいはい、これ持ってね、帰った帰った」

これを仕掛けた園子が、蘭と和葉の背中を押して部屋の外に出し、2人にドレス用のバッグを持たせた。

予め時間を指定して呼ばれていたホテルマンが、コートを手渡す。

「ルージュは入れてあるから、キスもOK。後はオトコどもに奢らせなさい。そうそう、荷物はあれだけでしょ？すぐに新一君の家に届けさせるわ。ついでに、お料理とケーキもね。ドレスは明日の夕方に引き取りに行かせるから、そのまま着て行っちゃって。それともここに泊まる？ベッドルームはちゃんと2つあるから問題ないわよ？」

立て板に水とはまさにこの事。

誰にも口を挟ませる隙を与えずに、園子がどんどん話を進める。

「そ……園子……」

「迎えに来てくれたんだよ？今日くらい素直になりなよ」

蘭と和葉にだけ聞こえるように声を響めた園子に、2人は小さく『ありがとう』と返した。

「メリークリスマス！この貸し、大きいからね！特に東西名探偵！」

園子の声に押されるように、4人はホテルを後にした。

イブは4人で

「でも、あたしたちがここに居るって、よくわかったね」

蘭の素朴な疑問に、新一は今回の首謀者の名前を上げた。

「園子から、迎えに来てってメールが来たんだよ」

「で、オレは工藤に呼び出されたんや」

「……それだけで来てくれたん？」

「来い言われたらしゃーないやろ？」

平次は仕方なさそうに肩を竦め、新一はため息をついて見せる。

本当に、園子に呼び出されて仕方なかったとしても、蘭と和葉には嬉しかった。

そのメールを無視する事も出来たのに、平次に至っては大阪から、わざわざ来てくれたのだ。

蘭と和葉が顔を見合わせて、少しだけくすぐったそうに笑った。

探偵としてその能力を開花させはじめた彼らと、待つ事を覚えさせられた自分たち。

待つのが嫌なわけではないけれど、時々どうしようもなく苦しくなって、逃げ出してしまいたくなる事がある。

それでも、こうして迎えに来てくれるから、また待っていていられるのだ。

待っていたと思うのだ。

少し歩きたいという彼女たちのリクエストで、4人でゆっくりと駅へと向かう。

蘭と和葉の着ている華やかなドレスは今、コートに隠されてしまっている。

それを残念に思っている事が、ふと目が合った瞬間にお互いの表情から読み取れて、新一と平次は小さく苦笑した。

園子に呼び出されたホテルで、部屋から出て来た2人に、息を飲んだ。

彼女たちが可愛いと言う事は十二分に知っていたし、ドレス姿を見たのも初めてではない。

けれど、今夜の彼女たちはいつもとは趣が違って、何でも知っていると思っていた幼馴染はこんな魅力も持っていたのだと、改めて気付かされた。

それは、彼らの胸の奥に締め付けられるような小さな痛みをもたらした。

……幼馴染などという言い訳を口にするのは、もう苦しいのだと

主張するように。

「俺ん家でいいよな？荷物もそっちに届くらしいし、飛行機も新幹線も最終出ちまっただろ？今からじゃホテルも取れねえだろうし、泊まってけよ」

新一が、少しぶっきらぼうに、既に決定事項だとも言わんばかりに、平次たちを誘った。

それから、少し柔らかな声音で、蘭に話し掛ける。

「和葉ちゃんいるし、蘭も泊まれっか？」

「あ、うん。今日は外泊するって言ってあるから大丈夫だけど……いいの？」

少し遠慮気味に問い返す蘭に、新一はニヤッと笑って見せた。

「イブだしな。園子が喰いモン届けてくれるつつってたし、4人でクリスマスってのもいいんじゃないかねえ？」

「賛成。オレ、ハラ減ったわ」

いかにも疲れましたというように肩を落とす平次に、和葉が首を傾げる。

「晩ご飯食べてないん？」

「喰っとるけどな、そんなモン、とっくにエネルギーとして使い果たしとるわ」

「じゃあ、何か温かいもの作ろうか？」

「せやね。スープとかならそんな時間からんし」

蘭の提案に、和葉も頷いた。

平次と新一が、その申し出を柔らかく断る。

「何もせんでええで？」

「あるモンで充分だろ？」

料理するのなら、彼女たちは着替えると言うだろう。

いつもなら彼女たちの手料理の方を選ぶが、今日はこのままできて欲しいと思う。

……もう少し、このままでもいいと思う。

イブを迎えた街を4人で歩く。

前を歩く彼女たちが、華やかに笑う。

少し歩調を速めた彼らが、彼女たちの隣に立った。

顔を見合わせると、自然と柔らかな笑みが零れた。

並んで歩くだけで、今はまだその手を取る事は出来ないけれど。
並んで歩くだけで、今はまだこの手を預ける事は出来ないけれど。

それでも、並んで歩けるのは自分だけの特権だからと、少しだけ優越感に浸ってみる。

この微妙な距離がとても愛しくて、もどかしい。

もどかしくて……。

……イブという名の魔法に縋ってみたくなる。

同じ願いを秘めながら、今はまだそうと気付かないこの二組の幼馴染たちを、まどろむような闇が包み込んでいた。

<Fin>

イブは4人で（後書き）

タイトルに偽りあり（笑）。

でも、諸事情により変更出来ないなので、このままにさせて下さい。

ちょうどクリスマスの季節でしたので、2年前に書いたものですが、初投稿にこの作品を選びました。

楽しんで頂けたなら幸いです。

次回もまた宜しくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2755b/>

クリスマスは工藤邸で

2010年10月28日03時11分発行